

児玉地域における古墳時代前期の土器様相(中)

—女堀川・旧赤根川流域の古墳時代前期の土器の分析を中心として—

松本 完

2 壺の分類と編年

児玉地域の古墳時代前期の壺は、口縁部形態や器形、整形・調整手法、装飾、とくに文様からみて、弥生時代後期以来の在来の壺である樽式・樽式系の壺や吉ヶ谷・赤井戸式²⁹⁾の壺と、外来の壺である南関東や中央高地、東海西部・東部、さらにより西方の諸地域に由来する壺の大きく2つに分けることができる。後者は、折返し口縁壺、複合口縁壺³⁰⁾、大廓式壺、パレス・スタイル壺(以下、「パレス壺」の略称を用いる)、いわゆる二重口縁壺を含む有段口縁壺、受口状口縁壺、単口縁壺、直口壺の8種に分けられる。

それぞれの壺は、通常法量により大型壺、中型壺、小型壺の3種に分けられるが、ここでは量的にも卓越する大型壺、中型壺を主に扱う。

また、集落跡出土土器を中心に分析、分類を試みるが、集落跡出土の壺は、資料の絶対数はもとより、全形を推しはかりうる資料の数が限られるため、墳墓出土土器も含め検討する³¹⁾。

なお、分類に関しては、前節で記したように、弥生時代終末期および一部古墳時代中期前半の壺を含み分類する。

以下、壺それぞれの分類案を示し、変遷の概要を記すことにしたい。

a 樽式・樽式系壺、箱清水式系統の壺³²⁾ および吉ヶ谷・赤井戸式壺

樽式・樽式系壺をA類、同じ櫛描文施文の壺である箱清水式系統の壺をB類、吉ヶ谷・赤井戸式壺をC類としたが、資料数はごく限られる。また、A・C類に伴う可能性のある無文の折返し口縁壺を、D類とした。各類型の推移、変遷については、第6図に示した。

A類

樽式・樽式系の壺を、A類とする(第6図1・2・13・14)。なお、樽式土器あるいは樽式系土器の変遷については、従前の研究を参考にした(飯島・若狭1988、大木2004・2020、坂本・利根川ほか1986、若狭1990・2007ほか)。

A1類 樽式・樽式系の壺のうち、折返し口縁の壺

を、A1類とする。粘土紐を張り合わせた口縁部で、頸部から胴部上位にかけて櫛描文の施文された壺である(第6図1・13・14)。

1の壺は、内外面のミガキの卓越、あるいは甕と大きく異なるものの器形からみても、壺としてよいであろう。口縁部に付加された粘土紐に厚みがなく、下端の段が微弱であることは、後述するC1類、吉ヶ谷・赤井戸式の壺の折返し口縁やD1類の折返し口縁とも共通する特徴である。休止点間の間隔の広い櫛描簾状文、弛緩した櫛描波状文は、弥生時代終末期以降の特徴と考えられる。

14は、折返し部の下半に輪積を段として残しており、樽式と赤井戸式の手法の混淆例である。

A2類 櫛描文の施された単口縁の壺を、A2類とする(第6図2)。櫛描文には、A1類同様に空隙が目立つ。この形態の壺に櫛描文が施されなくなると、単口縁壺ということになるが、器形などに、この系統の特徴を残す壺はほとんどみられない。

B類

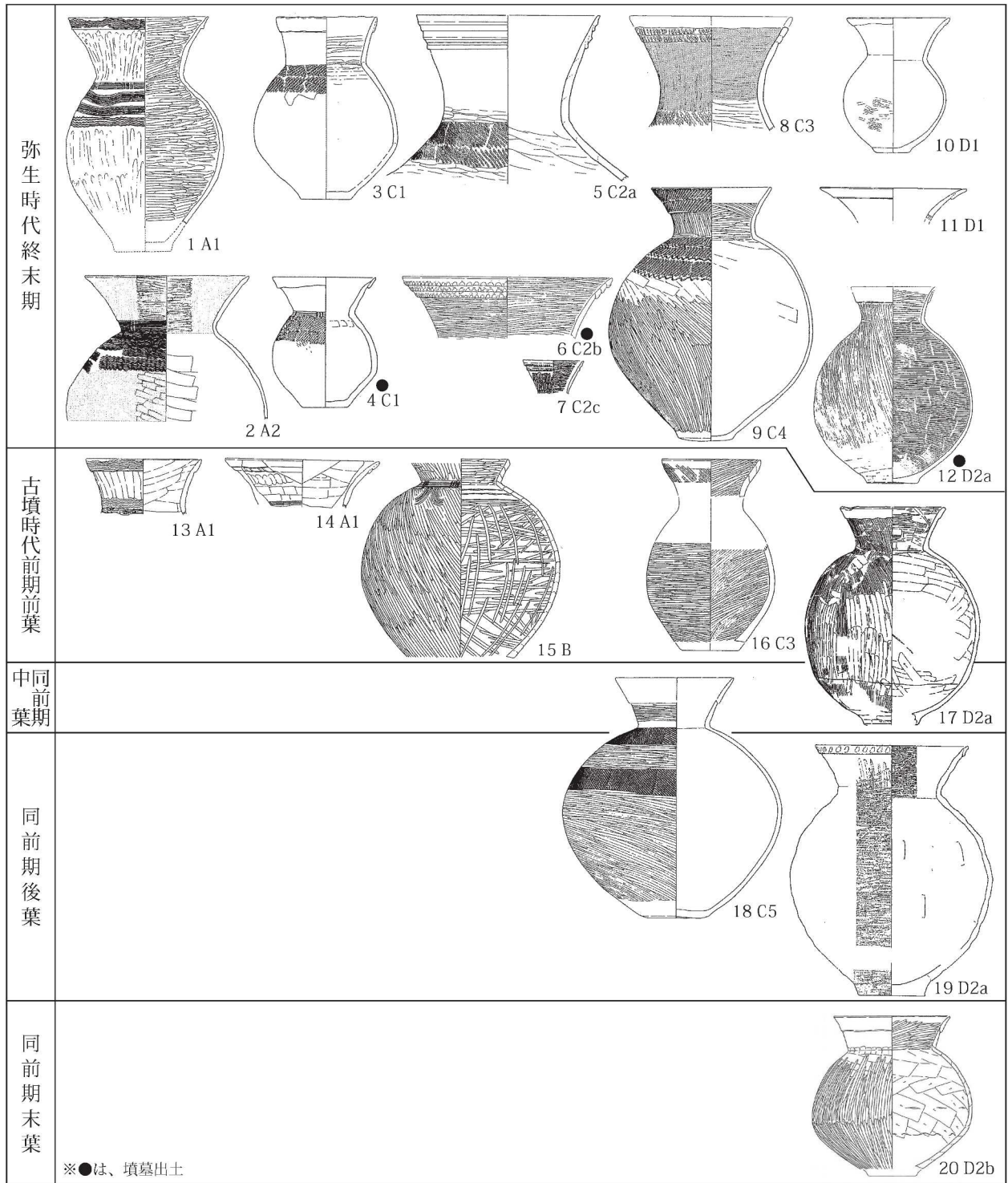
久下前地区C3地点105号住居跡(以下、久下東・久下前遺跡に関しては、旧遺跡名と同名の地区名のみ記す)から出土した1例(第6図15、恋河内・藤根2020:第127図1)のみではあるが、箱清水式の壺の一部に特徴的にみられる櫛描J字文の施された壺を、B類とする。

球胴状の胴部、強く屈折して立ち上がる頸部などの器形からみるなら、弥生時代後期後半～古墳時代前期の東海西部の壺、あるいはその影響を受けた壺とみられる。口縁部は欠失しているが、単口縁になろうか。

頸部下端の屈折部直下に、5条1単位の3、4連止めの櫛描簾状文が施文され、簾状文下端に簾状文を切って、J字状、逆J字状の櫛描文が加えられている。同一個体の破片によれば、J字文の一部は、直線に近くなっているようである。また、櫛描文は5本1組の工具によるが、工具端が不ぞろい、あるいは柔軟なためか、器壁に接しない部分が生じており、所により条線が3～5条となっている。

C類

吉ヶ谷・赤井戸式の壺を、C類(第6図5～9・



第6図 壺A～D類の変遷（縮尺：1／8。6のみ縮尺1／10）

16・18)とする。C類は、以下のように細分できる。

C1類 吉ヶ谷・赤井戸式の壺のうち、折返し口縁の壺を、C1類(第6図3・4)とする。口縁部は、低平で、下端の段も不明瞭なものが多い。胴部上位には、2段程度の帯縄文が密接施文されている。4の壺のくびれ部直下には、3連止めの櫛描簾状文が巡らされており、

A類、C類の施文手法の混淆例であるが、一応本類に含めておく。

C2a類 口縁部に輪積痕を段として2～4段装飾的に残す壺を、C2類とし、輪積部分を無装飾とするものを、C2a類とする(第6図5)。

C2b類 口縁部に輪積痕を段として残すのは、C2a

類と同じであるが、輪積み部分に押捺を加え、ひだ状に加工する壺を、C2b類とする(第6図6)。

C2c類 輪積痕の段をつまみ上げたり、段間に横ナデを加えるなどして隆線状とし、隆線に押捺や刺突を加える壺を、C2c類とする(第6図7)。7の壺は、内外面赤彩されており、同じ住居跡から内外面赤彩された鉢、船形土器および櫛描文施文の壺胴部片が出土している(浅野1999:第16図1~7)。赤彩された土器が卓越する点からみて、樽式・樽式系と共通し、7の壺も同類の壺になる可能性もあるのかもしれない。

C3類 口縁部に輪積みの段を2、3段残し施文部とし、縄文を施す壺を、C3類とする(第6図8・16)。16の壺では、最下段の輪積の段を境に、口縁部文様帯が形作られており、頸部下半にも縄文が巡らされている。

C4類 微段により画された口縁部に縄文が施され、胴部上位にも縄文が施された壺を、C4類とする(第6図9)。口縁部は、かすかに屈曲しながら外反する。胴部上位、肩部の縄文は3段で、帯縄文の下端には、端末結束による結節文が施されている。外面施文部直下、口縁部内面には、帯状にミガキを加えない部分が残されている。

C5類 胴部上位に、特徴的な帯状文が2帯施された壺を、C5類とする(第6図18)。上段の帯縄文は、縦回転らしく、下段の帯縄文も横回転の縄文ではないように見受けられる。

D類

壺A・C類、樽式・樽式系あるいは吉ヶ谷・赤井戸式に伴うと思われる無文の折返し口縁壺を、D類とする(第6図10~12・17・19・20)。児玉地域では、今のところ弥生時代終末期の丘陵上の遺構出土土器中に最初にみられるようであり、段部が不明瞭で、厚みのない折返し口縁の特徴や器形が類似する点からみて、共伴例が乏しこともあり、壺A・C類に伴う壺と考えた。

D1類 典型例ともいえるD類の壺を、D1類とする(第6図10・11)。上述したように、折返し口縁は、厚みがなく、折返し部下端の段は微弱で、時にひだ状となる。器形は、胴部がやや縦長の球胴状で、口径、くびれ部径に比し、胴部最大径が小さい。つまり通常の壺と比べると、より甕に近い器形であることが特徴になる。

D2a類 折返し部の特徴は同じであるが、D1類に比べ、口縁部の開きが弱く、頸部の短い壺を、D2a類とする(第6図12・17・19)。くびれ部は屈曲する。

口縁部形態は、一様ではないようである。

D2b類 他の特徴はD2a類と同じであるが、くびれ部の屈折が明瞭な壺を、D2b類とする(第6図20)。

A類に関しては、前節(松本2022)で記した甕と同様に、古墳時代前期前葉を最後にほぼ消滅するとみてよいようである。第6図13・14の壺(大谷・福田2011:第116図116・117)は、残存率の低い破片資料であり、同じ住居跡覆土中から出土した土器の時間幅からみて、前期前葉の可能性があると考えた³³⁾。

B類とした第6図15の壺は、A類と同じ「中部高地型櫛描文」(佐原1959、笹沢1978)のみられる壺であるが、特異な特徴がみられる。胴部上位、簾状文下端にみられる櫛描のJ字文は、中央高地、主に松本盆地とその周辺の弥生時代後期以降の壺に特徴的な文様とされている(直井1999)。ただし、単帯の簾状文に接して、その止めの部分とはずらして対向するJ字文を加える例は類例がないようである(直井、同上)。いずれにせよ、前述したように器形は東海西部、文様は中央高地という折衷型の土器である。

これまで関東地方では、箱清水式の影響がみられる土器、あるいは搬入土器に関しては、脚部に三角形の透かしの入った赤彩された有稜高環以外には、ほとんど認識されてこなかった経緯があり、今後さらに精査する必要があるかと思う³⁴⁾。

C類もA類と同様に、古墳時代前期前葉にわずかに残存する例を最後にほぼみられなくなるとしてよいようである。

C4類とした第6図9の壺は、器形や口縁部の低平な折返しはC類に通有のものであるが、胴部上位の縄文の下端にはそれぞれ縄文原体の端末による結節文が加えられており、類例をみない。下端に結節文を伴う2、3段の帯縄文からなる文様帯が胴部上位に施される壺は、相模川流域や武蔵野台地南東部から大宮台地にかけての地域の弥生時代後期後半以降、類例がしばしばみられる。端末結節による結節文を併用する縄文帯は、東遠江の菊川式に由来する文様であり、比企地域にまで、菊川式に後続するとされる三沢西原式の壺(鈴木2002・2021、中嶋1997)が少数ながらみられることには(福田・大谷ほか2012)、注意すべきであろう。

C5類の位置付けについては苦慮せざるをえないが、例外的な資料とみるか、あるいは吉ヶ谷式の搬入土器とみることもできるのかもしれない。時期的な位置付けにも不確定要素を含む。

C5類とした壺(第6図18)は、後張遺跡C地点の河川跡から出土した土器であり(恋河内2005:第102図9)、この河川跡から出土した土器の大半は、古墳時代前期末葉から中期前半に位置付けられる。

また、後張遺跡は、遺跡全体をどのように考えるかということ自体が難問であるが、時期的には、ごくわずかな古墳時代前期中葉の土器、遺構を除けば、古墳時代前期後葉から末葉にかけて、ひとつの盛期を迎えた遺跡であることは間違いない。18の壺の位置付けは、出土遺構だけでなく遺跡の盛衰ともかかわり、現状では、ある時間幅での位置付けが至当と考える。

D類については、器形や口縁部形態など微妙に異なるが、小島純一の赤井戸式の「壺B2」(小島1983:227-229頁)に類似し、若狭徹の樽式系の「壺Ⅶ3類」(若狭1990:14・15頁)の一種、赤井戸式の「壺B類」(同:19頁)の一部に類する壺とみることができる。

渋川市中村遺跡1号土坑でまとまって出土している例(大塚・小林ほか1986:第39図1~3)などをみる限り、樽式・樽式系に伴う壺である可能性が高いようであるが、そもそも東海東部などの無文化の早い地域の弥生時代後期後半以降の壺に由来する壺と思われる、現状では、その影響が及んだ時機、地域を限定することがむずかしい。

第6図19のD1a類の壺に関しては、同じ雷電下遺跡の別遺構ではあるが、前節で「平底甕D類」(松本2022:第1図23)とした赤井戸式の系統の、唯一例ともいえる特異な甕が出土しており、この甕との関係が考えられる。

D類全体としては、D1類からD2a類へ、さらにD2b類へと、大まかな推移を跡付けることができる。

b 折返し口縁壺、複合口縁壺および大廓式壺

本稿の壺A・C・D類および大廓式壺、パレス壺に含まれる折返し口縁壺を除いた折り返し口縁の壺をE類、複合口縁壺をF類、大廓式壺をG類とした。

東海東部から東京湾岸にかけての、主に太平洋岸の諸地域を中心に分布する口縁部形態の壺を念頭に置いて区分したが、例示できる資料は多くない。

E類

上記した一部の特徴的な折返し口縁壺を除いた折返し口縁壺をE類とし、口縁部形態から以下のように細分した。総じて口縁部は屈曲せず、真直ぐ、あるいは外反して開く。多くは無文であり、特徴に乏しい一群である(第7図1・4・5・7~9・11・12・16~21)。総じて装飾性に乏しいのは、本類の来源にかか

わるのかもしれない。

E1類 断面形が三角形に近い折返し口縁の壺を、E1類とする。前記したD類と区別がむずかしいものが含まれるが、一応折返し部下端の段が明瞭なことから器形に基づき区分した(第7図1・7・11・16・17)。

E2a類 断面形が長方形に近い折返し口縁のうち、貼り合わせられた粘土紐、粘土帯が薄く、幅広となるものを、E2a類とする(第7図4・5)。

E2b類 断面形が長方形に近いことは、E2a類と同様であるが、より厚みがあり、折返し部の幅もあまり広くないものを、E2b類とする(第7図8・9・12・18・19)。9の壺の口縁部内面には、篋描の細沈線により花卉様の文様と所々縦線の入った横線が施されている。また、8の壺の口縁部外面、端部上面には、網目状捺糸文が施され、施文部以外は赤彩されている。

E3類 折返し部下端の段が不明瞭となり、時に切れ切れで輪積痕と見まがうようなものを、E3類とする(第7図20・21)。

F類

複合口縁をF類としたが、複数の系統の壺を含むためか、E類よりさらに資料数が少ないにもかかわらず、多様である。口縁部は、粘土帯を貼り合わせたり、下端に粘土紐を付加して造作され、この点ではE類と異ならないが、内彎気味に開く。内彎が極々軽微なものもみられるが、この特徴がE類との違いであり、また、F類の壺の来歴を物語っている。F類を、以下のように細分する。

F1類 貼り合わされた粘土帯が低平で幅広な壺を、F1類とする(第7図2・3・6・10)。2の壺を除けば、口縁部下端の屈曲は、いずれも微弱である。2の壺の口縁部外面には、細い棒状浮文が付され、6の壺では縦の沈線が施されている。

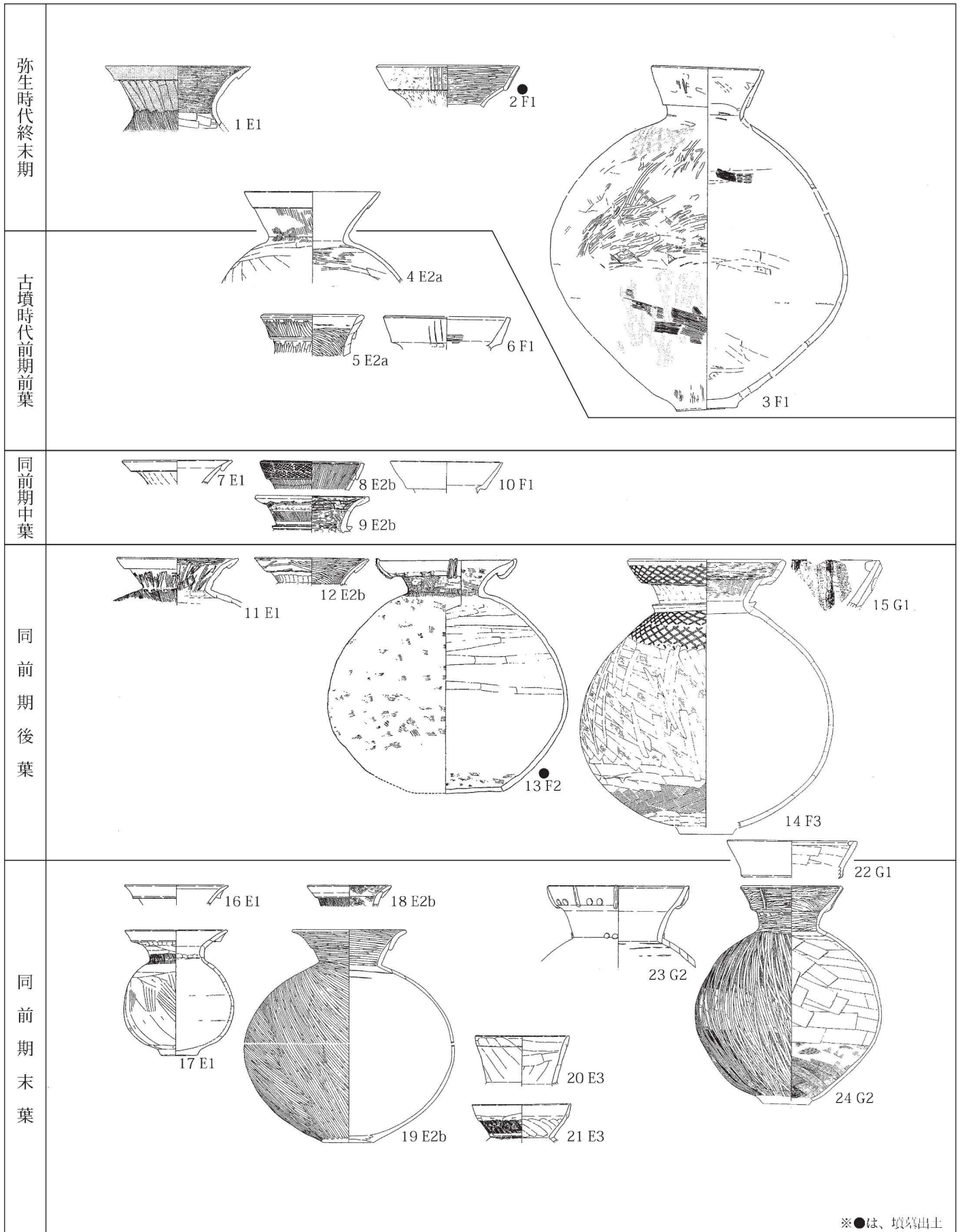
F2類 口縁部が断面三角形に近く、微妙に内彎しながら立ち上がる壺を、F2類とする(第7図13)。

F3類 中段に平坦面をもち屈曲する口縁部形態の壺を、F3類とする(第7図14)。14の壺の口縁部外面および肩部には、極太の原体による網目状捺糸文が施されている。有段化した複合口縁というか、形態的には有段口縁であるが、捺糸文施文の特徴を考慮し、複合口縁壺に含めた。

G類

大廓式の壺をG類としたが、資料数もわずかであり、また、大廓式の特徴の多くを欠く資料も含まれる(第7図15・22~24)。

G1類 端部内面に粘土紐を貼り付けた折り返し口



第7図 壺E～G類の変遷 (3は縮尺:1/12、15は縮尺:1/6、24は縮尺:1/10、他は縮尺:1/8)

縁の壺を、G1類とする(第7図15・22)。口縁部は、かすかではあるが、内彎する。これは、G類全体の特徴であり、この点でF類、複合口縁と共通する。

G2類 端部内面への粘土紐の貼り付けも省略され、かすかな突出がみられるだけとなり、折返し口縁も厚みのない低平となった壺を、G2類とする(第7図23・24)。大廓式の壺の特徴は、口縁部形態と棒状浮文くらいである。

まずE1類についてであるが、全形の判る資料が乏しいが、無文の壺が多く、また第7図1のように器形的にD類との近縁性をうかがわせる壺が多いようである。E2a類も、D2a類に近い器形になる可能性がある。

前期後葉前後を境に、頸部下端の屈折が明瞭になるとしたいが、17の壺のように、屈折がはっきりしない壺もあり、断定できない。ただし、17の壺の頸部は、かすかに筒状化しており、後述する有段口縁壺に近づいているとみることできる。

E2b類にはやや加飾壺が日立つが、資料数そのものが少なく、さらに踏み込むことができない。5の加飾壺は、口縁部形態も角張った独特の形状であり、網目状撚糸文と鮮明な赤彩の特徴からみて、大宮台地などからの搬入品である可能性が考えられる。E3類は、前期末葉にみられるようである。

F1類は、弥生時代終末期から古墳時代前期中葉にかけてみられるようであるが、2・3の壺のようなF1類の中でも低平、幅広の折返し口縁をもつ壺は、弥生時代終末期に限られるのかもしれない。F1類の2・3・6・10の壺は、東海東部から相模湾岸にかけての地域や山梨県域などで類例が散見される。

F2類とした13の壺は、断面三角形に近い幅の狭い複合口縁、口縁部外面の棒状浮文、太く短い頸部、異様に膨らんだ球形に近い胴部の壺である。細かな違いに目をつむれば、南関東あるいはより広域にわたって散見されるかに見える壺であるが、それぞれの特徴全体に目を向けるなら、類例に乏しいことに気づかされる。球胴状に肥大化した胴部は、墳墓に供されたが故であろう。

F3類の14は、さらに稀少例である。共伴する他器種の土器から、前期後葉の位置付けを考えたが、類をみない太い条の網目状撚糸文や頸部下端の突帯も特異である。文様の施された壺の最終段階の所産であろうか。

G類、大廓式壺に関しては、資料数が限られ、しかも変容例が多い。時間的位置付けとしては、大廓式の

後半、渡井英誉の「大廓Ⅲ式」(渡井1998・2021)以降としてよいかと思う³⁵⁾。

c パレス壺およびパレス壺の特徴を一部にもつ壺

パレス壺に関しては、すでに多くの研究の蓄積があり(赤塚1987・1990、浅井1986、大参1968、酒井・西島・早野2014、田口1981・1987、長滝・中沢2005ほか)、さらに付け加えるものはないかにみえるが、ひとつの遺跡で複数の遺構から全形のわかるパレス壺が出土する例は少なく、パレス壺の細かな変遷を遺構単位で跡付けることのできる資料に欠けることには留意すべきである。

この点で故地から遠く離れた地域の墳墓出土資料であり、パレス壺のある時点からの推移の過程ではあるが、美里町南志渡川遺跡の周溝墓出土土器群(長滝・中沢2005)は、遺構単位でパレス壺の時間的な推移を確かめうる稀有の資料である。

ここでは、南志渡川遺跡の諸成果(坂本1996、田口1987、長滝・中沢2005)に拠り、児玉地域におけるパレス壺およびパレス壺の特徴を一部にもつ壺の変容と変遷の過程について考えることにしたい。

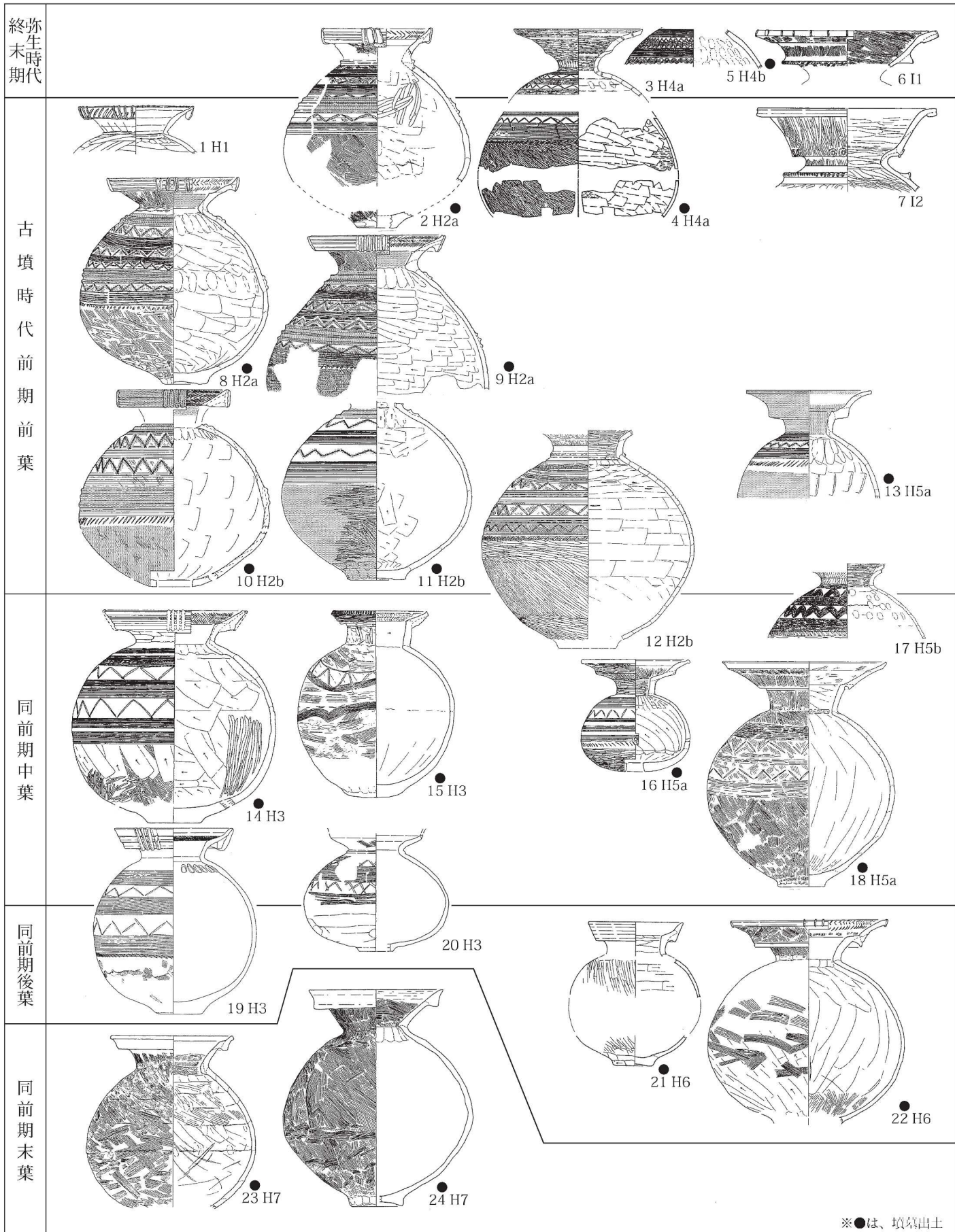
児玉地域のパレス壺の時間的な推移は、赤塚次郎が規定したパレス壺の定義(赤塚1987)に従うなら、パレス壺の要件となる特徴が、時を追って脱落する過程であり、そもそも厳密な定義はそぐわないように思われる。

ここでは、パレス壺の特徴を一部にもつ壺、パレス壺に類似した部分のある壺を含め、パレス壺の仲間、H類として取り扱う。なお、I類に関しては、折返し口縁と突帯の特徴から、ここで扱うが、パレス壺とは系統の異なる壺である。

H類

パレス壺およびパレス壺の特徴を一部にもつ壺を、H類とする(第8図1～24)。ここでは大まかな類別にとどめ、変遷の軌道を確認することにしたい。H類を、以下のように細分するが、H2・H3類は、口縁部形態・装飾、胴部文様にパレス壺と共通する特徴がみられる壺、H1・H4～H7類は、パレス壺の特徴を一部にもつ壺である。なお、H3類には、赤彩された壺はみられないようである。

H1類 口縁部下端が垂下する折返し口縁の壺を、H1類とする(第8図1)。1の口縁部外面には、へら状の工具による斜めの刺突が施され、刺突と交差するように棒状浮文が付されている。パレス壺とは似ても似つかないが、胴部上端から短い口縁部が直接開く形



※●は、墳墓出土

第8図 壺H・I類の変遷 (縮尺: 1/8)

態、口縁部の棒状浮文、屈折部に付された突帯など、パレス壺の影響とみられなくはない。

H2a 類 赤塚次郎がパレス壺を規定する要件として列挙した特徴(赤塚 1987)³⁶⁾をほぼ完備した壺を、H2a 類とする(第 8 図 2・8・9)。器形的には、胴部下位に最大径部位のある下膨れになるようである。2・8 では、不連続鋸歯状刺突文(以下、「不連続鋸歯状文」とする)が 3 列あるいは 4 列施され、刺突一つ一つに赤彩がなされているが、9 では、不連続部分が少なく、赤彩もひとつながりの鋸歯状に塗られている。

H2b 類 上記したパレス壺の特徴をおおむね備えることは H2a 類と同じであるが、不連続鋸歯状文の振幅や波長が間延びしたり、突帯列が省略され、赤彩が簡略化されたり、あるいは外面のハケメが二次調整により消されたりする壺を、H2b 類とする(第 8 図 10～12)。

10～12 では、胴部下位のハケメがミガキやナデにより消されており、H2a 類とは異なるようである。また、11・12 では、施文部下部の突帯列が省略されており、11 では、最下段の刺突列もみられない。

10 では、鋸歯状文の刺突が連結しており、ひとつながりの鋸歯状に赤彩されている。12 は、久下前地区 A1 地点の河川跡出土であり(恋河内・的野 2010: 第 115 図 12)、埋没過程での磨耗なども考慮しなければならないが、外面上半と口縁部内面に赤彩痕がわずかに残るのみである。

10 は口縁部外面が直立する古い形態に推定復元されているが、破片資料からの復元であり、「口径は図よりも大きくなり、側面が傾斜する可能性が高い」(長滝・中沢 2005: 73 頁)とする所見が加えられている。10・11 は、胴部上位の丸みが増すも下膨れの器形をとどめている。なお、10・11 の壺に関しては、「在地的な胎土とは異なる」(同上)可能性が指摘されている。

H3 類 H2b 類にみられた胴部文様の変容がさらに進み、口縁部外面の擬凹線文や内面の羽状刺突文、器形などにも変容のみられる壺を、H3 類とする(第 8 図 14・15・19・20)。赤彩がみられないことも、本類の特徴である。14・19 は比較的変容の少ない例にもみえるが、どちらの壺も、不連続鋸歯状文が大振りになり、突帯列が省略されている。また、19 では頸部直下の突帯列による区画がなされず、幅広の無文部となっており、口縁部内面の羽状刺突文も簡略化している³⁷⁾。

15・20 は、さらに変容が著しい例である。15・

20 では口縁部形態や装飾も、パレス壺の通則から逸脱しており、胴部外面の文様も変容が進行している。

総じて H2b 類より球胴化が進み、やや縦長の印象を与える器形が目立つようであるが(第 8 図 15・19)、20 のような偏球状の器形もみられる。

H4a 類 胴部上位に振幅の狭い刺突による山形文と櫛描直線文が交互に施された壺を、H4a 類とする(第 8 図 3・4)。3 の壺の口縁部形態は、後述する N 類の有段口縁壺のそれに近い(本節: 12 頁)。3 の壺の口縁部～頸部の内外面は赤彩されており、4 の壺の外面は施文部を含め赤彩されている³⁸⁾。

H4b 類 胴部上位にヘラ描の鋸歯状文と櫛描波状文、区画線として櫛描直線文を配する壺を、H4b 類とする(第 8 図 5)。H4a 類の 4 と同じく施文部全面が赤彩されているようである。

H5a 類 パレス壺の特徴がほぼ胴部文様に限られる壺を、H5a 類とする(第 8 図 13・16・18)。口縁部形態は多様であり、後述する有段口縁の分類では(本節: 10～14 頁)、13 が K1 類あるいは K2a 類、16 は L1 類、18 は K2b 類に含まれる。

胴部文様は、18 が不連続鋸歯状文帯と櫛描直線文帯が交互に配される文様配置を辛うじてとどめ、13・16 では、交互帯状施文の原則も形骸化している。13 は赤彩されており、「在地的な胎土とは異なる」(長滝・中沢 2005: 73 頁)可能性があると考えられている。

H5b 類 H5a 類に近いが、不連続鋸歯状文帯が櫛描波状文帯に置き換えられた壺を、H5b 類とする(第 8 図 17)。系統の異なる文様が、ある時点で取り込まれた例とみてよいであろう。17 では、文様帯最下段に斜位の刺突列を配する慣例が守られている。

H6 類 胴部が無文化し、口縁部の一部にパレス壺の形態や装飾が残る壺を、H6 類とする(第 8 図 21・22)。21 はパレス壺の口縁部形態をとどめ、外面には、擬凹線文を模した「刷毛状工具による横撫で」(長滝 1991: 108 頁)が施されている。22 の口縁部形態は、後述する有段口縁 J3a 類に含まれる(本節: 10 頁)。

22 の端部外面には、短い棒状浮文が付され、口縁部内面には、幅の狭い工具によるやや不規則な羽状刺突文が加えられている。胴部上位の文様施文部が、調整痕がみえないまでに平滑に仕上げられたままなのは、文様施文部を用意しながらも実際には文様を入れなかったか、文様施文と結びついた最終調整の強固な習慣が根強く残っていたからなのかもしれない³⁹⁾。

H7 類 胴部が無文化するとともに口縁部も無装飾化し、パレス壺との共通点が口縁部形態のみである壺

を、H7類とする(第8図23・24)。

I類

パレス壺ではないが、折返し口縁と突帯が特徴的な壺をI類とし、ここで触れておくことにしたい(第8図6・7)。

I1類 大きく開く折返し口縁の下端に強く突出する突帯を付した壺を、I1類とする(第8図6)。幅の狭い端部外面には、ごく短い棒状浮文が貼り付けられ、突帯先端には、刺突が加えられている。内外面ともにハケメを残す。

I2類 頸部が短く屈曲し、段を有し大きく開口する折返し口縁の壺を、I2類とする(第8図7)。口縁部下端には、輪状の浮文が間隔をあけて2個ずつ配され、肩部には突帯が付され、刺突が加えられている。

H類全体の変遷について簡単にまとめ、I類の位置付けについても触れておきたい。パレス壺およびパレス壺との共通点の多いH2類、H3類について、まず記し、続いてパレス壺との共通点がわずかなH1類、H4～H7類について記す。

前期前葉には、パレス壺の特徴をほぼ完備したH2a類とした壺(第8図8・9)が確実にみられるようになることは間違いない。

問題となるのは、第8図2の壺である。古墳時代中期の志渡川古墳出土土器であり(長滝・中沢2005:第91図223)、前代の土器が周溝に混入した例である。

周溝に混入した土器は、古い時期の土器に限れば、弥生時代後期、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての2時期にほぼ限られ、後者では、時期をさらに限定できる土器の多くは弥生時代終末期に収まる。

2の壺の口縁部は、外面が直立気味で、内面施文部がえぐれたように内彎する形態であり、口縁部外面が明瞭に外傾し、内面施文部がかすかに段をなし、施文部より下位で屈折する形態の同図8・9に先行する特徴をもっている⁴⁰⁾。また、胴部上位がなだらかで下膨れが目立つ2の壺は、器形的にも、球胴状に近い8・9の壺より古い特徴を備えるとみることができる。

胴部の施文部の広狭および胴部文様帯下端の刺突列の有無が一律に時期差を表さないとすれば、大きな時間的懸隔は考えにくいにせよ、2の壺は、8・9の壺より、いくらか時間的に遡る位置付けができると考える。

H2b類にみられる不連続鋸歯状文の変容(10・11)、胴部文様帯下端の刺突列の省略と器形変化(11・12)、赤彩範囲の拡大(10・11)とその一方での赤彩の粗略

化(12)からみて、H2a類からH2b類への推移を推定できる。

H2b類には、不連続鋸歯状文だけを取り上げれば、H2a類と大きな違いのない壺(12)がみられ、全体として装飾手法の簡略化や省略が部分的、跛行的にみられることからすれば、H2a類とH2b類とは、やはり大きな時間差を含まないとみるのが穏当であろう。

パレス壺たる要件として特有の赤彩を算えるなら(赤塚1987・1990)、H3類とした壺(14・15・19・20)は、パレス壺の範疇から外れることになる。口縁部装飾、胴部文様の簡略化や省略は、急速に進行したようであるが、胴部文様の消滅の時期を確定することは、それほど容易ではない。現状では、古墳時代前期後葉には、例外的な例を除けば、壺がほぼ無文化したことは推定してよいであろう。したがって、H3類とした壺に関しては、ほとんどが前期中葉に位置付けできるとしたい。

H1類に関しては、折返し口縁や棒状浮文、胴部上端から屈折して短い口頸部が開く器形などに、パレス壺とのわずかな共通点がみられるのみである(第8図1)。管見に触れえた限りでは、愛知県東部、東三河の例が唯一例である⁴¹⁾。

H4類も、胴部文様以外には、パレス壺との類似点に乏しい(第8図3～5)。おそらく弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけて、パレス壺と部分的な共通点しかもたない壺(3・4)が、パレス壺の出現に先立ち、あるいは一部併行しながら、本地域で見られるようになる。I1・I2類とした壺(6・7)も、そうした動向と無関係ではないのであろう。

H5a類、H5b類に関しては、前期前葉には早くもみられ、当初よりパレス壺の諸特徴が変容しているようである(13・16～18)。口縁部形態も多様であるが、とくに有段口縁壺にパレス壺の胴部文様を取り入れられる例がほとんどである。赤彩は、赤彩痕の可能性が指摘されている18の壺(長滝・中沢2005:48頁)を最後にみられなくなるようである。

口縁部装飾と一部口縁部形態にのみパレス壺の特徴がみられるH6類は、例数が少ない(21・22)。

H7類も例数が限られるが、この種の壺(23・24)は、公卿塚古墳出土の壺(菅谷1970:第4図)を好例として、古墳時代中期前半まで残存することが知られている。公卿塚古墳出土の壺の場合、24の壺に比べ、折返し口縁の厚みが減じており、パレス壺の口縁部形態からさらに遠ざかっていることがみて取れる。

I1類、I2類は、折返し口縁と突帯が特徴になる。

12 類の 7 は、頸部がなく、くびれ部直上から屈折し、大きく開く口縁部に連なる独特な形態である。折返し口縁であること、頸部がない点、くびれ部直下の突帯など、パレス壺と似てなくもないが、くびれ部上の屈折や口縁部下端の輪状の浮文は、有段口縁壺の一種にも似ている⁴²⁾。

d 有段口縁壺

ここで有段口縁壺と呼ぶのは、これまでの各節で触れた複合口縁壺、大廓式壺やパレス壺などに含まれる有段口縁壺を除いた有段口縁壺である(第 9・10 図)。大半は「二重口縁壺」という呼称の当てはまる壺であるが、「二重口縁壺」の呼称にそぐわない壺も含まれる。ごく一部を除いて、無文であることも特徴の一つである。

以下、J～N 類の 5 類に分け、それぞれの類をさらに細分して、変遷の概要を記すことにしたい。

J 類

「畿内系二重口縁壺」とも呼称される有段口縁壺である(第 9 図 1～8・10～15・19～22・26～30)。数多の研究成果の蓄積があり(蒲原 1989、寺沢 1986、田口 1981、田中 2002、利根川 1993・1994、野々口 1996、比田井 1995、古屋 1998、山本 2022 ほか)、それら諸成果に依存しながら議論を進めることを明記しておきたい⁴³⁾。

J1a 類 頸部から口縁部にかけて強く屈曲し、屈折して口縁部が大きく開く壺を、J1 類とする(第 9 図 1・10)。1 の壺では、口縁部外面下端は突出し、突出部直上には、輪状の刺突が加えられ、頸部下端には、突帯が巡らされている。残存部分からみて、頸部から胴部上位、肩部にかけても屈折せず、屈曲する器形になるのであろう。相対的にみれば、細頸である。

10 の壺は、1 の壺に比べ口縁部の開きが弱く、頸部が太いことからすれば、1 の壺より後出することは間違いないが、残存率の低い破片資料でもあり、時期限定がむづかしい。

J1b 類 口縁部内面下半に平坦部をもち、屈折して外反しながら大きく開口する壺を、J1b 類とする(第 9 図 2)。残存率の低い破片資料であり、口頸部の接合方法など不明であるが、一応本類に含めた。屈折部以上の口縁部が急角度で立ち上がる点で、あるいは後述する M 類(本節：12 頁)と関係する可能性もないではないが、推測の域を出ない。

J2 類 細い頸部から屈折して平坦部を有し、さらに屈折して口縁部が大きく開く壺を、J2 類とする

(第 9 図 3～8)。短い細頸で、口縁部が外反しながら大きく開くことが、他と分かつ特徴になる。

頸部は、おおむね筒状である⁴⁴⁾。口縁部内面下半の平坦部は、5・7 のように明瞭で水平に近いもの、3・6 のように傾斜をもち不明瞭なものなどがあり、種々みられる。平坦面に屈折して接合する口縁部上半の接合手法には、いくつかあるようである。

3 の端部外面には、短く細い棒状浮文が間隔をあけて付されている。7 は外面前面が赤彩されており、頸部直下には、櫛描波状文が施文されている。

J3a 類 J2 類に比べ、頸部が太く、口縁部の開きの弱い壺を、J3a 類とする(第 9 図 11～14・19～21・26)。11・14・19 を除いて、おおむね口縁部は、J2 類に比べ短く、外反の度合いも弱い。口縁部下半の平坦部も、J2 類に比べて狭くなり、不明瞭になるようである。

11・14 のように、口縁部の開き具合からみるなら、J2 類の壺に近いものもあるが、頸部が太くなるらしく、11 の壺に関しては、前期前葉から中葉にかけての位置付けを考えた。

19・20、後述する 23 は、美里町南志渡川遺跡 2 号墓から出土した壺であり(長滝・中沢 2005：第 33 図 2・3、第 34 図 4)、19・23 の分厚い作りのやや細めの頸部、外反し大きく開く口縁部、下膨れの器形、20 の口縁部下端の垂下、23 の頸部から胴部上半にかけての赤彩と、他の壺にはみられない特徴が随所にみられる。さらなる検討が必要ではあるが、墳墓に供せられた壺に特有の変容の一種である可能性も考えられる。

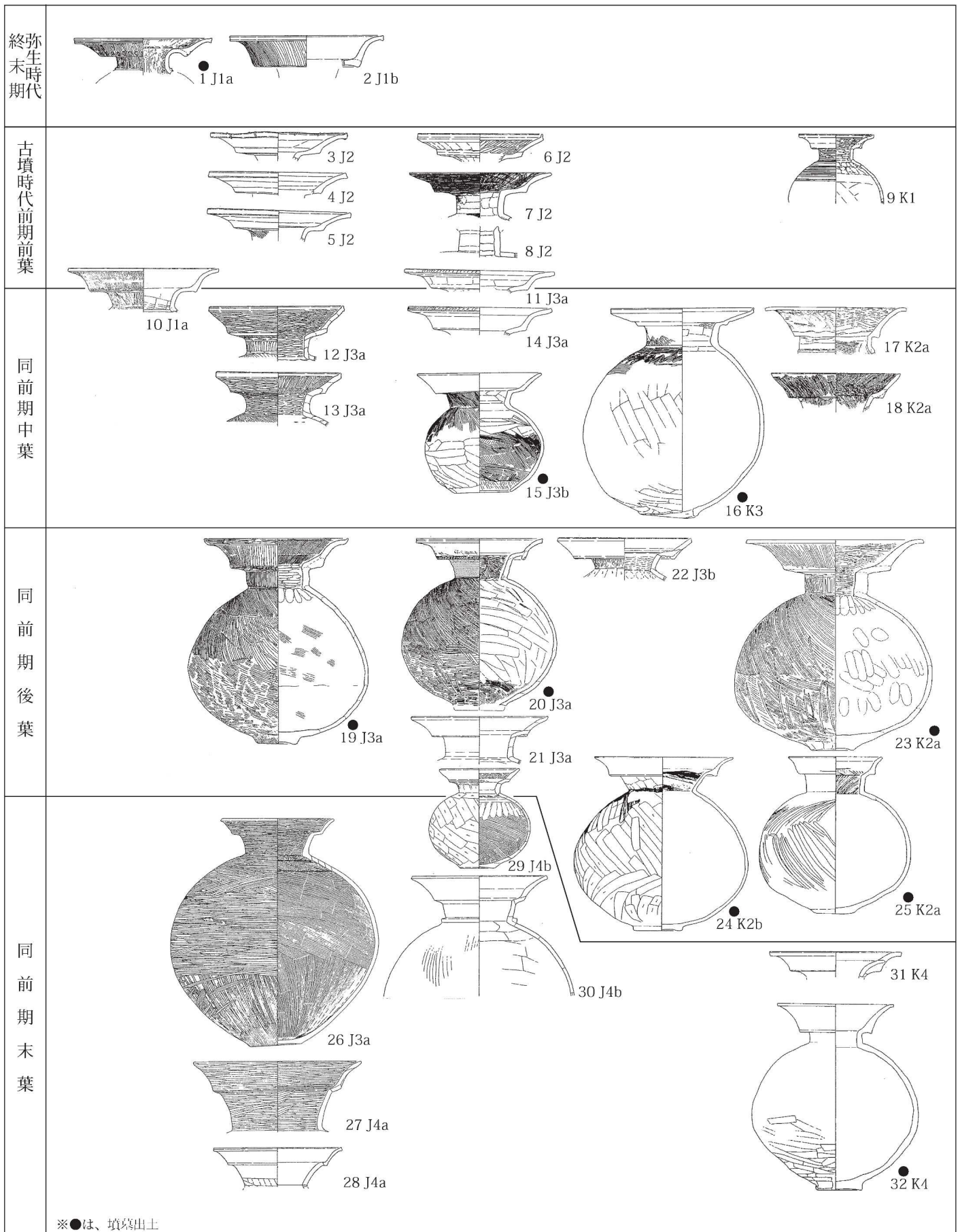
J3b 類 J3a 類に比べ、頸部の短い壺を、J3b 類とする(第 9 図 15・22)。頸部が短くなるとともに、口縁部も短くなるようである。

J4a 類 J3a 類に比べ、口縁部下半の平坦部の幅が狭く、口縁部と頸部の開き具合が同じような壺を、J4a 類とする(第 9 図 27・28)。27 のように頸部が外反し、口縁部下半の平坦部があるかないか微妙な壺も含まれ、後述する N 類の壺(本節：12 頁)と口縁部形態ではほとんど区別できなくなる。この種の壺は、古墳時代中期前半まで存続する。

J4b 類 J4a 類に比べ、頸部が短い壺を、J4b 類とする(第 9 図 29・30)。

K 類

筒状あるいは逆円錐台状の太い頸部から屈折して開く口縁部で、口縁部外面下半に稜をもつ壺を、K 類とする(第 9 図 9・16～18・23～25・31・32)。J



第9図 壺J・K類の変遷 (縮尺: 1 / 8)

類との違いは、口縁部内面下半の平坦部の有無であり、本類の口縁部内面は、総じてS字状の緩やかな曲線を描き、平坦部はみられない。ただし、J類との区別がむつかしいものもみられる。頸部が短いことも、本類の特徴の一つである。

口縁部外面の稜の部分は、通常粘土帯を重ね合わせ分厚く造作されている。稜の直上に面をもつものもたないものがあるが、前者は、この部分に浮文や刺突文などを付した名残りであろう。K類を以下のように細分する。

K1類 K類の中で頸部の細いものを、K1類とする(第9図9)。9の小型壺の胴部上位には、櫛描直線文が巡らされ、端部、頸部、施文部以外の外面、口頸部の内面は、赤彩されている。

K2a類 K1類に比べ、頸部の太い壺を、K2a類とする(第9図17・18・23・25)。18を除いて、口縁部外面の稜以上は強く外反するが、内面では、屈折部直上にいくらか彎曲する部分が見られる。23の端部は、つまみ上げられ、突出する。

K2b類 頸部が筒状のK2a類とは異なり、上部に向かって大きく開く壺を、K2b類とする(第9図24)。

K3類 内面の屈曲が弱く、口縁部が外反せず直線的に開くとともに、口縁部外面の稜がわずかに突出する程度である壺を、K3類とする(第9図16)。口縁部下半の稜の部分も厚みが増さず、口縁部全体が同じような器厚である。

K4類 頸部がさらに短くなり、口縁部内面の屈曲が微弱になった壺を、K4類とする(第9図31・32)。口縁部外面の外反も滑らかであり、外面の稜の直上も直立気味にならない。

L類

筒状に近い頸部から口縁部が微妙に屈曲しながら大きく開く壺を、L類(第10図4～6・9)とする。口縁部の外観は、J類と大きく異なるが、口縁部内面に平坦部はみられず、平坦部にあたる部分が椀のような丸みを持ち、その彎曲部分から屈曲してかすかに外反する口縁部上半に連なる形態である。L類を、L1類、L2類の2つに区分する。

L1類 上記した口縁部形態を備える典型的ともいえる壺を、L1類とする(第10図4～6)。4の壺の口縁部外面には、2個1組の棒状浮文が付されている。棒状浮文には、密に刺突が加えられている。

L2類 L1類に比べ、口縁部の屈曲が弱く、頸部の短い壺を、L2類とする(第10図9)。

M類

筒状に近い頸部から屈折し、幅広の平坦部をなし、再び屈折して口縁部が直線的に開く壺を、M類とする(第10図7・10・11)。現状で全形が推定できるのは、墳墓から出土した3個体の壺のみであるが、それぞれ特有の特徴をもつため類別した。

M1類 平坦部内外縁の屈折が明瞭で、頸部が筒状に近い壺を、M1類とする(第10図7)。7の壺の胴部上位には、櫛描直線文、波状文が施文されている。

M2a類 M1類に比べ、平坦部内外縁の屈折が鈍く、頸部も上部が開く壺を、M2a類とする(第10図11)。口縁部には円孔が穿たれ、胴部には、焼成後も推定される赤彩痕がみられる(増田・坂本ほか1986:18頁)。底部は、焼成前に穿孔されている。墳墓専用土器として特化しつつある壺であろう。

M2b類 M2a類に比べ、さらに屈折部内外縁の屈折がなだらかになるとともに、平坦部自体傾斜をもち、頸部もより長く伸びた壺を、M2b類とする(第10図10)。10の壺の外面は、赤彩されている。

N類

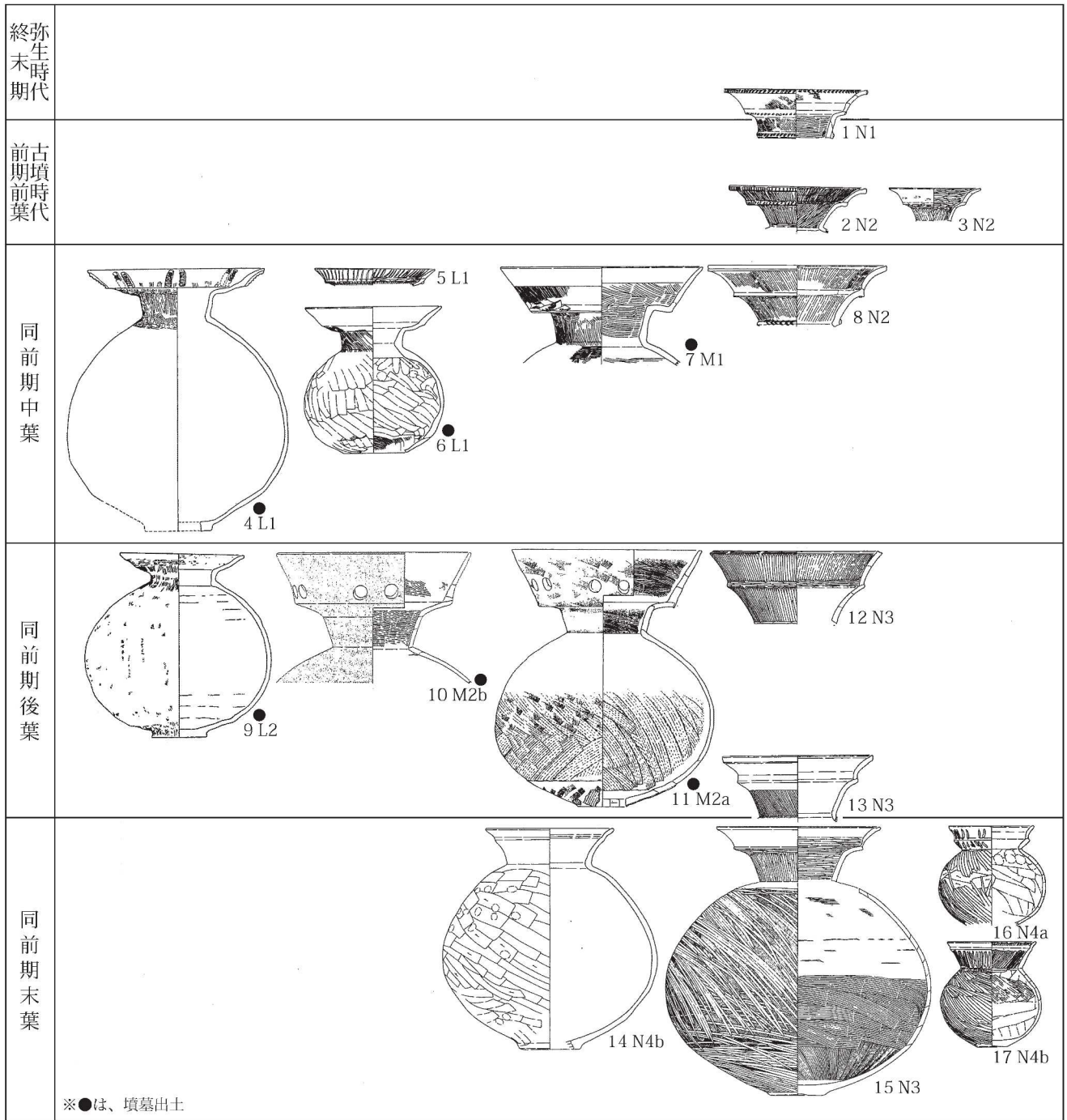
「伊勢型二重口縁壺」と呼称される有段口縁壺である(田口1981)。断面形で、頸部から連なる弧と口縁部をなす弧の2つの弧からなる口頸部形態の壺を、N類とする(第10図1～3・8・12・13・15～17)。口縁部と頸部は峻別できないが、一応屈折部下で、曲率がわずかに変わる部分までを口縁部、以下を頸部と仮称する。

本類に関しては、田口一郎による編年案があり(田口1981:85-89頁)、大きな変更を加える余地はない。田口の編年案に拠り、N類を以下のように細分する。

N1類 柱状気味の頸部から口縁部が短く屈曲した後、屈折外反して開く壺を、N1類とする(第10図1)。口縁部に比べ、頸部が短いことも特徴になるようである。外面端部、屈折部、頸部下端の突带上、内面端部には、刺突が加えられている。時期の異なる住居跡から出土した破片資料である(恋河内・的野2014:第155図29)。

N2類 頸部が大きく外反して立ち上がり、屈折部以上の口縁部も頸部同様に大きく開く壺を、N2類とする(第10図2・3・8)。口縁部と頸部は同じような長さである。2の外面端部、屈折部、8の頸部下端の突带上には、刺突が加えられている。

N3類 N2類に比べ、口頸部の外反度、開き具合ともに軽微な壺を、N3類とする(第10図12・13・15)。口縁部より頸部が長い。13・15の壺では、口



第10図 壺L～N類の変遷 (縮尺：1／8)

縁部外面のミガキが省略されている。

N4a類 N3類に比べ、さらに口頸部の彎曲が微弱な壺を、N4a類とする(第10図16)。小型壺であり、好例とは言えないが、1例のみ例示する。

N4b類 口頸部の彎曲が、さらに微弱になり、かすかに屈曲するのみの壺を、N4b類とする(第10図14・17)。

有段口縁壺J～N類の変遷について、簡単にまと

めておく(第9・10図)。

J類についてであるが、まずJ1a類、J1b類が問題になる(第9図1・2・10)。J1b類はひとまずおき、J1a類に関しては、J1a類の口頸部形態が弥生時代後期以来の形態である点からみて、J1a類の一部は、J2類(同3～8)に先行するとみて無理はない。ただし、J1a類からJ2類へと変遷したとみるのは、口頸部の製作手法として飛躍が大き過ぎ首肯できない。J2類

は、新たに筒状の頸部を完備した状態で出現したと考える。

また、J1a類は、10の壺のように、屈曲する口頸部形態以外、新しい特徴のみられるものがあり、古墳時代前期中葉までは、残存した可能性があることが推定できる。

J2類(3～8)からJ3a類(11～14・19～21・26)へ⁴⁵⁾、さらにJ4a類(27・28)へと変遷、推移したとみてよいであろう。一方、J3b類(15・22)、J4b類(29・30)のように短頸化した一群も併行してみられるようである。筒状の頸部は、前期後葉を転換期として、29のような短頸の小振りな小壺を例外として、ほぼ逆円錐台状の上部に向かって開く形態の頸部に入れ替わるようである。

J4a類は、後張遺跡179号住居跡出土の壺(増田・立石1982:第184図1)などを好例として、中期前半まで残存する。J4a類、J4b類には、ナデ調整の卓越や胎土、色調などの手掛かりがなければ、前期末葉、中期前半どちらか識別できない壺が、ある程度含まれる。

K類に関しては、K1類からK2a類へ、K4類へと推移したと考えられる(第9図9・16～18・23～25・31・32)。K2b類(第9図24)を除いて、短頸で筒状の頸部形態は、ほぼ一貫した特徴である。

L類は、例数が少なく、J類と区別しにくいいため、とくに類型化されることの少なかった有段口縁壺である(第10図4～6・9)。類例は、山梨県域に多く⁴⁶⁾、愛知県域、長野県域、群馬県域、埼玉県域などに散見される。L1類(第10図4～6)からL2類(第10図9)へと推移したと推定した。

M類も類例が少ない(第10図7・10・11)。弥生時代後期以降、口縁部が直線的に開く壺は、菊川式土器の一部や大廓式土器を典型として、天竜川以東の静岡県中央から東部、相模湾岸と山梨県域、旧国では、東遠江から相模西部および甲斐の壺に時にみられる特徴である。

鷲山古墳の壺(11:増田・坂本ほか:第5図1)に加えられた羽状のハケメなども考慮して、東遠江から駿河にかけての壺であろうと記したことがあるが(松本・藤根ほか2015:302頁)、山梨県域などを含めるなら、この考えに大きな変更を加える必要はないかと思われる。

M1類からM2a類へと推移したとみられる(第10図7・11)。M2a類(11)とM2b類(10)の違いは、M1類とM2a類との違い以上に大きく、際立ってい

るが、同じ鷲山古墳出土の壺であり、製作者の違いなどに起因すると考えざるをえない。

N類は、N2類からN3類へ、さらにN4a類、N4b類へと推移したとみられる(第10図1～3・8・12～17)。N1類からN2類への推移については、田口一郎の考え(田口1981:第55図)に従ったが、立証できる材料はない。

一貫して端部のつまみ上げが微弱なのは、地域的な変容、変異なのかもしれない。N類は、墳墓に供された例がみられないことも特徴になる。

N4a類は、小型壺(16)のみ例示したが、古墳時代中期前半までは、口頸部の屈曲の弱い中型の壺として残存する⁴⁷⁾。

e 受口状口縁壺

ここで便宜的に「受口状口縁壺」と呼称した壺は、端部が受口状に屈曲、屈折する壺である(第11図1～16)。

O類

上記した特徴をもつ壺を、O類とし、以下のように細分する。

O1a類 端部の屈曲が軽微で、屈曲部以上が短い壺を、O1a類とする(第11図2～5)。端部をわずかにつまみ上げただけのもの(3・4)、端部を挟んで加えられた横ナデにより外面が凹線状にくぼむもの(2・5)などがある。4の頸部下端の突帯には、刺突が加えられている。

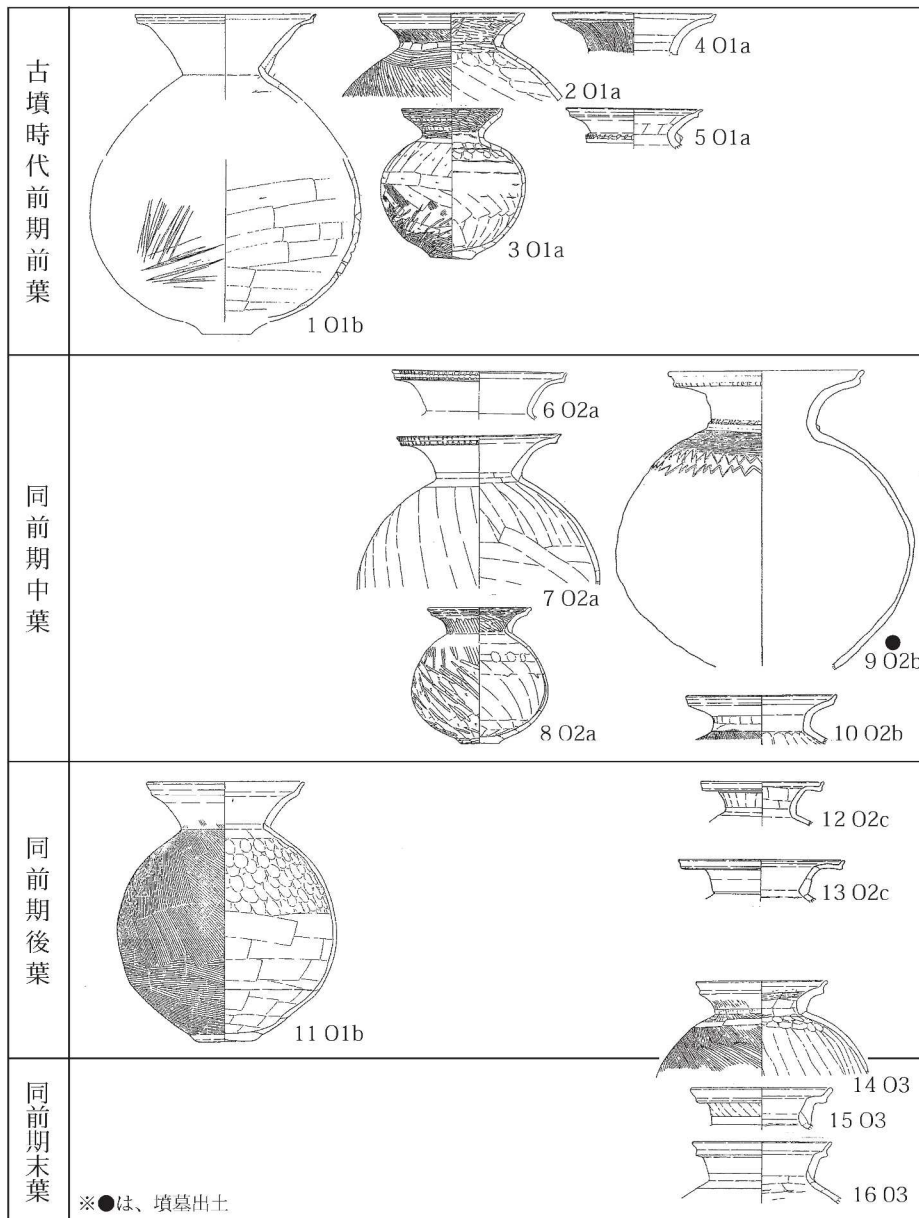
O1b類 O1a類に比べ、端部の屈曲が明瞭で、屈曲部以上が長い壺を、O1b類とする(1・11)。口頸部がラッパ状に開くことは、O1a類と同じである。

O2a類 ラッパ状に開く頸部から屈曲して口縁部が水平に近く開き、端部が立ち上がる形態の壺を、O2a類とする(6～8)。6・7の端部および屈折部の外面には、刺突が加えられている。

O2b類 頸部上端から屈曲して口縁部が開き、端部で再び屈折する形態の壺を、O2b類とする(9・10)。柱状に近い明瞭な頸部がみられるのは、本類からである。9の胴部上位には、櫛描直線文と篋描鋸歯状文が施されている。

O2c類 O2b類に比べ、口縁部の開きが増し、水平に近い口縁部から端部が屈折する形態の壺を、O2c類とする(12・13)。

O3類 柱状あるいは逆円錐台状の頸部から幅の狭い平坦部を経て、口縁部上半が立ち上がる形態の壺を、O3類とする(14～16)。O類の中でも、はっきり有



第11図 壺O類の変遷(縮尺:1/8)

段口縁壺化した壺とみることができる。頸部が分厚く作られており、15・16は、ナデ調整が顕著である。

O類は、由来や系統のよく判らない壺⁴⁸⁾であるが、胴部上位から口頸部がラッパ状に開く一群(O 1 a・O 1 b類:第11図1~5・11)と、口縁部と頸部が分離しはじめた壺から有段口縁壺に近い壺までを含む一群(O2a~O2c類・O3類:同図6~10・12~16)の大きく2つに括ることができる。

時間的推移としては、O 1 a類は、前期前葉に多いように見え、また、O2a類からO2b類、O2c類へ、さらにO3類へという推移の過程が推定できる。O3類の一部は、古墳時代中期前半にまで下る可能性がある。

14・17)。

P 3類 口頸部が内彎して立ち上がる壺を、P3類とする(第12図12)。

P類の時間的推移は、主に器形変化の大まかな変化の傾向としてしか記すことができない。

まず、P1a・P1b類についてであるが、弥生時代終末期以降、P1a類からP1b類へと推移したことは間違いないが、この変化は、おおよそ前期後葉には、P1a類がみられなくなるという漸移的な交替と考えられる。全体的な器形変化の流れは、前期前葉まで下膨れの器形がみられるが、胴部の球胴化が進行し、ほぼ前期後葉までには、球胴化が完成するといった筋書き

f 単口縁壺

単口縁壺は、大半が装飾性に乏しいこともあり、器形や器面調整などを基準に、大まかな推移を跡付けることしかできない。なお、弥生時代終末期には、図示した単口縁壺以外にも、数種の特徴的な単口縁壺があるようであるが、古墳時代前期以降とのつながりのある単口縁壺しか掲げていない。

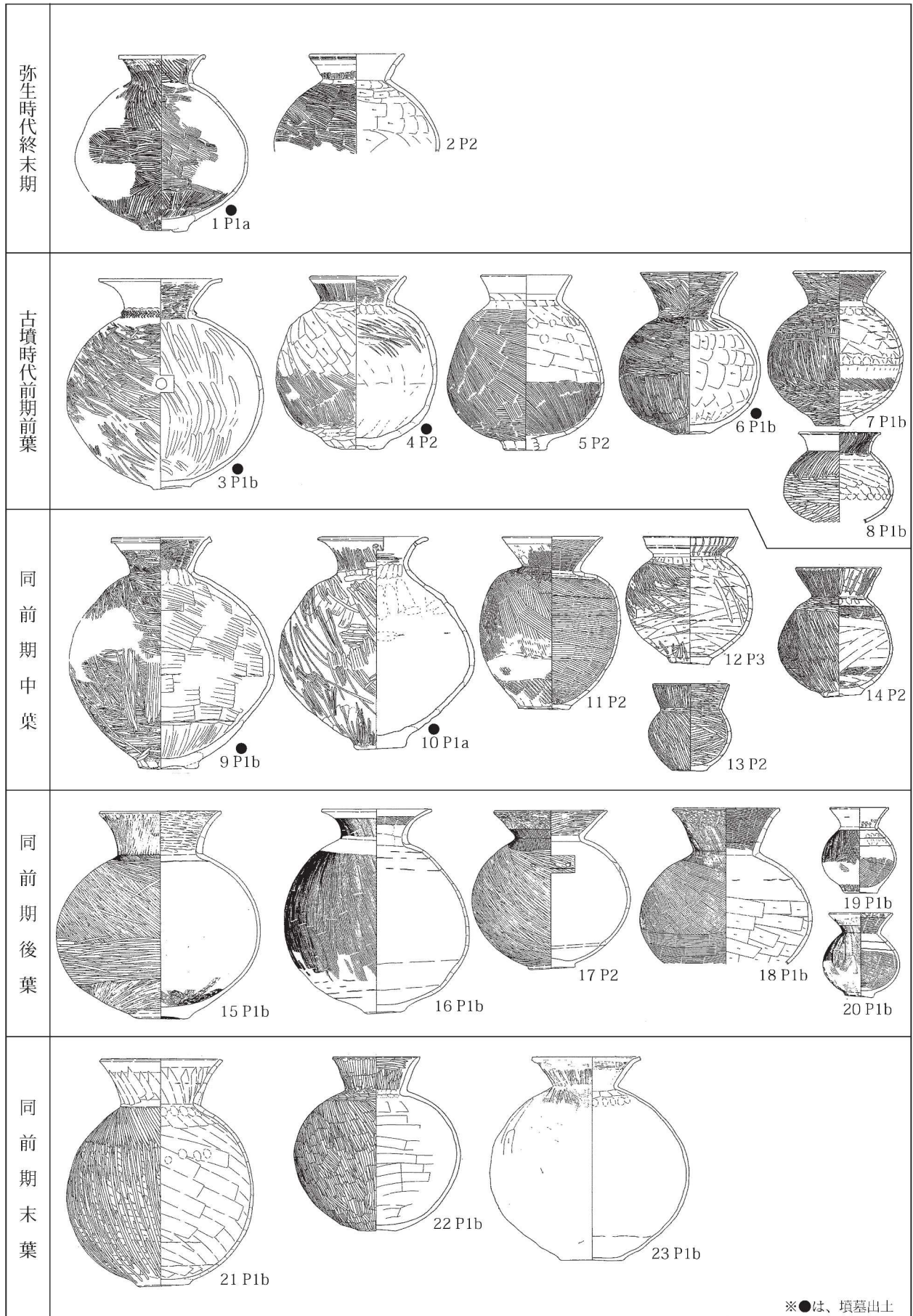
P類

単口縁壺をP類とし(第12図)、口頸部形態に基づき、以下のように細分する。

P1a類 口頸部が外反する単口縁壺のうち、頸部が彎曲して胴部上位から連なる壺を、P1a類とする(第12図1・10)。

P1b類 口頸部が外反し、頸部下端が屈折する壺を、P1b類とする(第12図3・6~9・15・16・18~23)。大半の単口縁壺は、このP1b類に含まれる。

P2類 口頸部が直線的に開く壺を、P2類とする(第12図4・5・11・13・



第12図 壺P類の変遷 (縮尺: 1 / 8)

になる。9・10のような胴部最大径部位が、胴部中位のわずかに下寄りの位置にある器形は、あるいは時期的な特徴なのかもしれないが、即断できない。

前期末葉には、23のようなP1b類の外側ナデ調整の壺がある程度盛行することが予想されるが、中期前半の単口縁壺との峻別がむづかしいこともあり、好例を抽出することができない。

g 直口壺

直口壺は、胴部上位から頸部を介することなく口縁部が立ち上がる形態の壺である(第13図)。口縁部高が胴部高の2分の1を超える法量の壺を典型例とするが、前期後葉以降、口縁部が短くなる傾向があり、前期末葉には、典型から逸脱する例もみられるようになる。

器高が24cm以上の大型、24cm未満15cm前後の中型、それ以下を小型と便宜的に区分する。

Q類

上記した特徴をもつ直口壺を、Q類とし、口縁部形態に外面の調整の特徴を加味し、以下のように細分する(第13図)。

Q1a類 口縁部が内彎して開く直口壺のうちで、外面調整が主にミガキによるものを、Q1a類とする(第13図1・3・4・10・11・13～15・16・20～23・26・30・33・37)。

大半の直口壺がこの類型に含まれるが、15のように口縁部が内彎し、端部で微妙に外反する、いわゆる「瓢形壺」に近いものを含み、口縁部の彎曲具合や胴部形態などもかなり多様である。Q類の外面調整は、全体的にミガキが主流であるが、ミガキの方向やミガキの精粗、工具幅などは雑多である。

Q1b類 口縁部が内彎して開く直口壺のうちで、外面調整がナデやケズリによるものを、Q1b類とする(第13図5・12・25)。前期前葉から前期末葉まで、少数みられるようである。5では、端部外面および口縁部内面に横位のミガキが加えられており、異例の調整手法である。

Q2a類 口縁部が直線的に開く直口壺のうち、外面調整がミガキを基調とするものを、Q2a類とする(第13図2・9・19・24・32)。後述するQ2b類の大型直口壺(27)を含めて、口縁部が直線的に開く直口壺には、大型のものが目立つようである(2・9・19)。

Q2b類 口縁部が直線的に開く直口壺のうち、外面調整がナデやケズリのものを、Q2b類とする(第

13図27～29・31・34・36)。古墳時代中期前半まで本類は残存するが、総じて口縁部がやや短くなり、丸底化が進む。ただし、前期末葉の直口壺との峻別がむづかしいものが含まれる。

Q3a類 口縁部が外反する直口壺のうち、外面調整がミガキを主とするものを、Q3a類とする(第13図17・18)。美里町南志渡川遺跡1号墓出土のごく小型の直口壺に限られる(長滝・中沢2005:第28図11・12)。

Q3b類 外面調整が主にナデ、ケズリの口縁部が外反する直口壺を、Q3b類とする(第13図35)。

35は、前山2号墳から出土した小型壺である(小久保・柿沼ほか1978:第64図2)。34のQ2b類の直口壺と同様に、胴部上位の屈折部直下に丸い刺突列が巡らされている⁴⁹⁾。

Q4類 口縁部が細く、筒状に近く立ちあがる直口壺を、Q4類とする(第13図6～8)。「細頸壺」とも呼ばれる壺であり、6の壺口縁部については、「北陸地方の細頸有段口縁壺を模倣したもの」(恋河内1999:51頁)とみる意見もある。7・8の壺は、直口壺の一種とみて無理はない。

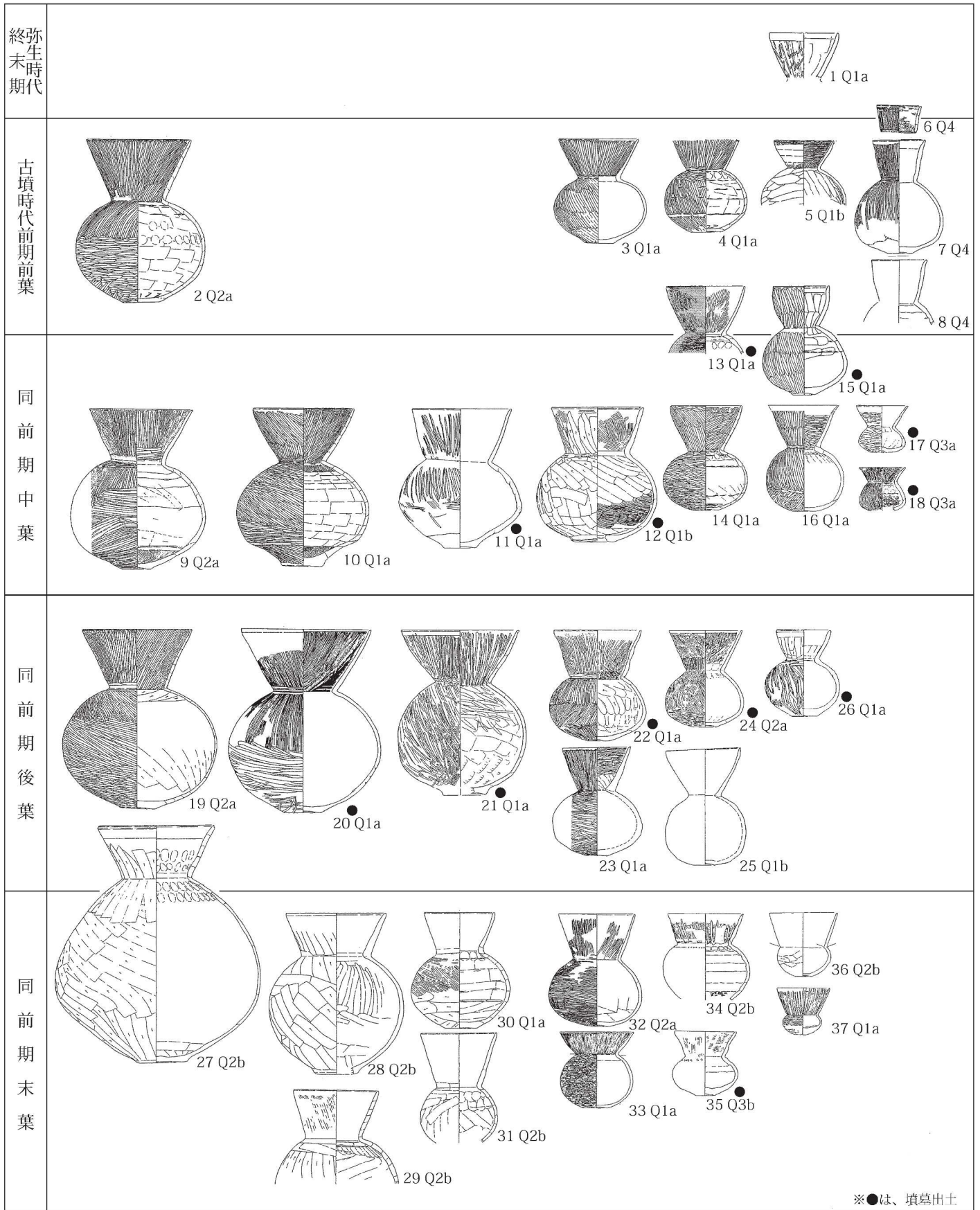
Q類、直口壺の変遷については、まず、弥生時代終末期に、それほど精製的ではない小型壺の一種として出現したようである(第13図1)。この段階から古墳時代前期前葉にかけては、系統の異なる細頸のもの(6～8)もみられる。前期前葉には、大型・中型の直口壺が出そろう可能性もあるが、例数が限られ、確言できない。

端部が外反する「瓢形壺」に近いもの(15)は、前期後葉以降にはみられず、赤彩されるもの(4・13・14)も、確かな例は、前期中葉までである。

久下前地区A地点の河川跡からは、廃棄、遺棄されたと考えられる⁵⁰⁾古墳時代前期中葉を主とする土器が多数出土しており(恋河内・的野2010:111-125頁)、同地区B地点の河川跡からは、同様の前期後葉を主とする土器がやはり多数出土している(同書:167-174頁)。これらの前期の土器群では、単口縁壺と並んで大型・中型の直口壺が、壺の組成の中核を成す器形である。

また、前期中葉・後葉には、方形周溝墓や前方後方形周溝墓などの墳墓に、直口壺が盛んに供献されたことにも注意したい(第13図11～15・17・18・20～22・24・26)。

直口壺の変遷に話を戻すなら、器形変化が一つの手掛かりになるうか。もちろん例外もあるが、前期中葉



第13図 壺Q類の変遷 (縮尺: 1/8)

までは、総じて胴部最大径部位が低く、あるいは胴部下位の接合部が屈折するもの(10)、算盤玉状を呈するもの(11)などもみられる。また、屈折部が細く、そこから口縁部が内彎しながら大きく開く器形の直口壺(3・10・13・14)も、前期前葉から中葉にかけて目立つようである。

前期後葉には、胴部の球胴化が進み、胴部の中央あるいは中央よりやや下に、最大径部位をもつわずかに偏球状を呈する器形(19～22・24～26)が多い。

前期末葉には、Q2b類、直線的な口縁部と外面調整のナデ、ケズリを特徴とする直口壺(27～29・31・34・36)が盛行する。器形的にも、頸部が太く、口縁部が短い器形のもの(28・29・34など)が多くなる。胴部も文字通りの球胴状のもの(28・30・31・34)が増える傾向が看取できる。

口縁部が外反するQ3a類、Q3b類(17・18・35)に関しては、小型でも格別に小さい壺に限られ、しかも墳墓に供された例ばかりであり、系統を異にする可能性がある。

以上記した壺の変遷、推移について、論じきれなかった問題点を記し、小結としたい。

一つは、壺からみた他地域との併行関係に関する点である。併行関係については、前節の甕では、S字甕の推移を軸に東海西部との併行関係を考えたが(松本2022:16頁)、壺に関しては、パレス壺が手掛かりとなる。

パレス壺については、先述したように美里町南志渡川遺跡の周溝墓群出土のパレス壺およびパレス壺の特徴を一部にもつ壺(本節の壺H類)の編年案(長滝・中沢2005:185-190頁)に依拠した。また、時期区分と東海西部との併行関係についての考案(同上)についても、おおむね妥当であると判断したが、細部に相違点が残った。

南志渡川遺跡の編年案では、本稿の古墳時代前期前葉から前期末葉、中期前半までを6期に細分し、「Ⅰ～Ⅳ期」に関して、「Ⅰ期」を「廻間Ⅱ式3段階前後」、「Ⅱ期」を「廻間Ⅱ式3～4段階」、「Ⅲ期」を「廻間Ⅲ式前半」、「Ⅳ期」を「廻間Ⅲ式後半」とする位置付けを行なっている(同上:186頁)。

相違点は、南志渡川遺跡の「Ⅰ期」、「Ⅱ期」を前期前葉にまとめた点と、廻間遺跡の赤塚編年(赤塚1990)との併行関係に関する点である(松本2022:16頁)。

まず、南志渡川遺跡の「Ⅰ期」、「Ⅱ期」を前期前葉にまとめたことについてであるが、南志渡川遺跡の「Ⅰ

期」の基準資料は、同遺跡の4号墓出土土器であり、「Ⅱ期」の基準資料は、同5号墓出土土器であるが(長滝・中沢2005:第127図)、両墓出土の、とくにパレス壺の違いは、一部の文様の形状変化と赤彩手法の微妙な違いであり、そこに大きな時間的懸隔を見込むことはできないと判断したためである。この考え方は、長滝歳康の「Ⅰ期」、「Ⅱ期」の併行関係についての微妙な位置付けからも(同上:186頁)、うかがい知ることができる。細別時期を設けるには、さらに例証を重ねる必要があると考える。

赤塚編年との併行関係の問題については、廻間遺跡から出土したパレス壺のほとんどが破片資料であることもあり、赤塚編年にパレス壺の細部にわたる編年基準を求めることができないことが問題になる⁵¹⁾。現状では、S字甕を基軸とする編年を、パレス壺の編年によって補強することはむづかしいと言わざるを得ないが、S字甕の編年だけでなく、パレス壺や他器種、他器形のあらゆる該期土器の編年を整備し、相互に比較することで、時期区分、段階区分をより明確に、精緻にしてゆく外ないであろう。

併行関係に関連して、児玉地域および一部の地域では、S字甕の出現だけでなく、定型的なパレス壺、故地の装飾手法をほぼ完備したパレス壺の出現に加えて、J2類とした柱状の細頸で、口縁部が大きく開く有段口縁壺の出現によって、古墳時代前期のはじめを劃せる可能性があることも付言しておきたい。パレス壺に関しては、不確定要素が残ることについては、先述したとおりである(本節:9頁、第8図)。

墳墓出土の壺と集落跡出土の壺の対比については、改めて論じる機会をえたいが、一つ気付いた点のみ記すなら、点在するそれぞれの墓域に供された壺が、それぞれかなり異なることである。

南志渡川遺跡の周溝墓群出土の壺が好例であるが(長滝・中沢2005)、これほど多数のパレス壺およびパレス壺の特徴を一部にもつ壺、壺H類が供献された墓域は、児玉地域のみならず東日本でも、稀有の例である。児玉地域では、パレス壺が供献された墳墓自体が、南志渡川遺跡以外にはない。

また、墳墓に供献された壺の一部しか例示していないため判りにくいかもしれないが、塚本山古墳群の38号方形周溝墓から出土したF2類の壺(第7図13、増田・小久保ほか1977:第20図2)、L2類の壺(第10図9、同上:第20図4)や同古墳群21号墳北トレンチから出土したL1類の壺(第10図4、同:第157図)は、わずかな例外(第10図5・6)を除けば、

他の墳墓だけでなく、集落跡出土土器中にもほとんどみられない壺である。

さらに鷺山古墳から出土した M2a 類の壺 (第 10 図 11、増田・坂本ほか 1986 : 第 5 図 1)、M2b 類の壺 (第 10 図 10、恋河内・藤根ほか 2018 : 第 352 図) は、時期的に先行する北堀新田前地区 2 号墓出土の M1 類の壺 (第 10 図 7、松本・藤根ほか 2015 : 第 58 図 9) を除いては⁵²⁾、児玉地域では、類例が皆無に等しい壺である。

墳墓出土の壺が、集落跡でみられないことは、葬墓祭祀に特化した壺が出現し、定着してゆく流れの中で説明できるが、特定の墓域にしかみられない壺が多いこと、墓域単位で、きわめて個性の強い壺が選択され、それぞれの墳墓に供せられたことには、別の説明、解釈が求められる。

この場合、墓域を造営し、葬墓祭祀を主催した集団が、それぞれ異なった集団と交渉をもち、独自の交流網を通じて壺を調達したり、その交流網を通して壺の製作にかかわる情報を入手したとみるのが、最も素直な解釈であろう。

この問題を解くためには、墳墓に供せられた壺だけでなく、供献土器全体の比較を進め、それぞれの土器の来歴を突きとめるとともに、供献土器の構成的特質に踏み込んだ分析が必要であると考え。今後の課題である。

註

29) 前節 (松本 2022 : 7 頁) で、児玉地域の古墳時代前期の縄文施文の甕とその系統に連なる甕を、諸特徴からみて赤井戸式に近似するとした結論に反するようであるが、後述するように壺に関しては、赤井戸式ではなく、吉ヶ谷式に固有の大型壺 (第 6 図 18、恋河内 2005 : 第 102 図 9) が、後張遺跡 C 地点から出土していることを考慮したためである。また、壺に関しては、口縁部の特徴からだけでは、吉ヶ谷式と赤井戸式との区別だけでなく、樽式・樽式系壺とも区別できないものが、かなり含まれるのも事実である。

30) 「複合口縁」の用語は、南関東、東海東部では、折返し口縁の一種の、折返し部 (口縁部に貼り合わされた粘土帯や貼り付けられた粘土紐) の下端に屈曲を有し (屈曲が軽微、あるいは屈曲がほとんどみられないものを含む)、内彎する口縁部形態を指す。慣用的に使い続けてきた経緯もあり、本稿でも用いる。

単口縁壺以外の、折返し口縁や有段口縁などの口縁部に何らかの造作を加える壺の口縁部を総称する用法とは異なる。

31) 改めて述べるまでもないが、集落跡出土土器と墳墓出土土器の違いは、集落跡出土土器にはみられない器種、器形の土器が、墳墓出土土器にはみられることに留まらない。壺に関しては、集落跡出土の壺と墳墓出土の壺では、変化の軌道や方向性自体が異なる場合がある。

時系列での推移と機能差にもとづく変容、変異が交錯するため、ある種の危険性が伴うと予想されるが、集落跡出土の壺と墳墓出土の壺の編年の位置付けを合わせ推定した後に、改めて集落跡出土の壺と墳墓出土の土器として選択された壺の差異や変化の軌道の違いを考える方法もありうると考えている (比田井 1995 : 88・90 頁)。なお、墳墓出土土器の重要な特徴である底部穿孔や欠壊については、触れることができなかった。稿を改め論じたいと思う。

32) 長野地域の弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器には、「御屋敷式土器」なる名称が用いられる場合があるが (森嶋 1982、青木 1989・1993 ほか)、一致した見解をえるには至っていないように見受けられる。よって本稿では「箱清水式系統の壺」なる呼称を暫定的に用いる。

なお、第 6 図 15 の壺に関しては、菊池健一氏を介して、青木一男氏、大木紳一郎氏、千野 浩氏、中島庄一氏から所見をいただいた。

33) 第 6 図 13・14 の壺は、川越田遺跡 D 地点 51 号住居跡の覆土中から出土した資料 (大谷・福田 2011 : 第 116 図 116・117) であり、前節では同住居跡に混入した土器とみなした (松本 2022 : 註 23)。混入品であることに変わりはないが、おそらく E3b 類の甕 (大谷・福田 2011 : 第 121 図 198) とともに、古墳時代前期前葉に含まれる可能性があると考えに至った。

34) J 字文の施された壺は、樽式土器の分布圏である群馬県域でも稀少なようである。高崎市中居町一丁目遺跡の方形周溝墓から櫛描の簾状文、波状文と波状文を切る対向する J 字文が施された壺が出土していること (大木 2007 : 第 49 図 10) を、大木紳一郎氏よりお教えいただいた。「樽式 3 期新相」とされ、第 6 図 15 の壺より時期的にやや遡るらしいが、箱清水式土器の影響が、群馬県域の弥生時代後期、高坏以外にもみられることを物語る好例であろう。

35) 久下東・久下前遺跡では、第 7 図 15 の大廓式壺破片を胎土分析に供しており、胎土中の岩片などの特徴から、遺跡周辺の粘土材料により製作された土器であるとの結論を得ている (恋河内・藤根ほか 2018 : 423-434 頁)。

36) 赤塚が 1987 年の時点で、パレス壺を規定する特徴として記したのは、第一に口縁部の擬凹線文であり、

- 第二に「横描と刺突あるいは屈曲線を組み合わせて構成される」(赤塚 1987:53 頁)「体部上半の文様帯」(同)、最後に「赤彩を一つの原則に基づき施される点」(同)という3つの特徴である。赤塚は、廻間遺跡の報告書でも、パレス壺を規定する特徴として、ほぼ同じ3つの特徴を掲げている(赤塚 1990:78 頁)。
- 37) 第8図19の壺は、後張遺跡C地点195号住居跡出土であるが(恋河内 2005:第27図1)、この壺が唯一床面直上から出土している以外、大半が前期末葉の他の土器は、すべて覆土上層出土とされている(同上:45-46 頁)。よって、共伴関係からは前期末葉以前ということまでしか判らないため、遺跡自体の継続期間、類似点の多い第8図14の壺などから、可能な時間的位置付けを考えた。
- 38) 第8図4の壺に関しては、恋河内昭彦による詳細な観察にもとづく位置付けがなされており(徳山・恋河内ほか 2000:9~11 頁)、参照した。
- 39) 胴部上位、肩部の文様施文部位に限って、ハケメなどの一次調整痕をナゲ消して平滑に仕上げた壺は、他に鷺山古墳出土の壺(本節:第10図1、増田・坂本ほか 1986:第5図1)を掲げることができる。鷺山古墳の壺(同上)が、北堀新田前地区A2地点2号墓出土の、胴部上位に櫛描文の施された同種の口縁部形態(M類、本節:12 頁)の壺(本節:第10図7、松本・藤根ほか 2015:第58図9)に直統することについては、簡単に触れたことがある(同:302・303 頁)。
- 40) 第8図2の壺の口縁部形態は、赤塚次郎のパレス壺、「壺A」(赤塚 1990:56 頁)の口縁部形態「A4」(同)、同図8・9の壺は、「A3」と「A5」が融合したような形態(同)とみられる。赤塚の編年表(赤塚 1990:第33図)によれば、「A4」は「廻間3期」(同、廻間I式後半)に、「A3」は「廻間5期」(同、廻間II式前半)に出現するとされている。この考案に、口縁部外面の直立から外傾への変化を加味するならば、2の壺が8・9の壺より古い可能性は高いと思われる。
- 41) 愛知県安城市下懸遺跡B区SD01出土土器中に類例がみられる(池本・赤塚ほか 2009:図版54・土器実測図10-258)。早野浩二が愛知県東部、東三河に特徴的な壺として仮称した「刺突文系壺」(酒井・西島・早野 2014:250・251 頁)の一種であろう。パレス壺の擬凹線文をハケ具やヘラによる羽状刺突列に代える地域的な特色があり(同上)、1の壺の口縁部外面にみられる斜位の刺突列と縦の棒状浮文の組み合わせが生み出されたのであろう。
- パレス壺の中心分布域と日される濃尾平野低地部(浅井 1986)の周辺地域との関係が示唆されたわけであるが、パレス壺と全く無縁ではないようである。
- 42) 遠隔地ではあるが、琵琶湖北岸地域の滋賀県長浜市五村遺跡の円形周溝墓出土土器中の大型壺(植野・信里 1997:図版57-27)に、多くの類似点があるように思われる。折返し部の形態、頸部の有無、くびれ部下の突帯の位置など違いがあるが、折返し口縁であること、頸部あるいはくびれ部以上の形状、口縁部下端の輪状の浮文など類似点も多い。
- 43) 利根川章彦、野々口陽子による「二重口縁壺」の成形手法、とくに屈折部の接手法による分類、変遷案(利根川 1993・1994、野々口 1996)は、極めて重要な試みと考えるが、悉皆精査する機会をもてず、その視点を取り入れることができなかった。ただし、経験的ではあるが、屈折部の接手法に関しては、粘土帯を重ね合せたり、部分的に貼り付け補強するかなり複雑で多様な手法があると考えている。
- 44) 第9図3~5・7・8のJ2類の壺が出土した美里町野中遺跡遺物集中区からは、小型壺ではあるが、上部が明瞭に太くなった頸部片が出土している(宮井 2011:第32図50)。小破片らしく、有段口縁壺になるかどうか判らないため例示していないが、前期前葉の段階に、上部の太い逆円錐台状の頸部もありうると考えている。
- 45) J2類からJ3a類への変化は、器形の数値化の手法を用いて、古屋紀之が導き出した「二重口縁壺A形式」の細く長めの頸部から太く短い頸部への変化(古屋 1998:36-47 頁)や、同じような数値化の手法で、山本亮が「二重口縁壺B・C系統」で「庄内式新段階から布留式古段階」にかけて細頸化が進行し、以降太頸化が進むとした変化(山本 2022:10-16 頁)と同じ変化であろう。
- 46) 山梨県域の類例の一つとして、山梨県西八代郡市川三郷町(旧三珠町)上野遺跡1号方形周溝墓出土の壺(堀ノ内ほか 1989:第39図2・4・5)を掲げることができる。
- 47) 有段口縁壺の変遷とは別に、有段口縁壺の製作にかかわる観察について付言しておきたい。
- J3b類の壺(第9図15)、K3類の壺(同16)、L1類の壺(第10図6)、M1類の壺(同図7)は、北堀新田前地区2号墓出土土器(松本・藤根ほか 2015:第58図3・4・8・9)であるが、いずれも内面頸部下端に独特の内傾する面をもち、肥厚する特徴的な作りの壺である。作り癖のようなものであろうか。複数の類別にまたがる壺であるが、同一製作者の作とは言えないまでも、同じ土器製作手法の流儀をもった製作者あるいは製作者たちが作った一群の壺とみることができる。
- 48) 手掛かりが全くないわけではない。端部外面に対向する刺突文の加えられた第11図6・7の壺につい

ては、愛知県稲沢市堀之内花ノ木遺跡 SK160 から類例が出土している(蟹江・赤塚ほか 1994: 図版 16-97)。SK160 出土土器は、赤塚次郎が「廻間Ⅱ式 4 段階」(同上: 36 頁)に位置付けた一括性の高い土器群であるが、赤塚は、上掲 97 の刺突文の壺を、その出土位置から一括出土土器から除外し(同上)、別稿でより古い段階に位置付けている(赤塚 1997: 第 18 図)。

- 49) 胴部上位あるいは肩部の刺突文(列点文)といえば、山陰系土器の装飾手法の影響とされる布留式甕の同種の列点文(次山 1995)が、思い浮かぶ。実際山陰地方、鳥取県域では、第 13 図 34・35 のような小型直口壺(口縁部が短く、鉢の一種とみた方が適切であろうか)の胴部上位に、列点文を巡らせる例がみられるようである(西村ほか 1983: 第 20 図 12)。ただし、列点文は、斜位で細い。
- 50) 後張遺跡 E 地点では、彎曲する河川跡と彎曲の内側の平場から、多量の土器とともに、玉類や多数の石製模造品が出土しており、古墳時代前期末葉から中期前半にかけて、「河川に関する祭祀が執り行われて

いた可能性」(高林 2011: 43 頁)が指摘されている。

また、前節で(松本 2022: 16・17 頁)、例えば山陰系 S 字甕、台付甕 F 類は、河川跡から集中して出土する顕著な傾向がみられ、河川跡にかかわる何らかの行為に係る土器であるとする推定を記した(同上)。古墳時代前期の段階に、「水辺の祭祀」のようなものがどこまで展開していたのか、いささか心許ないが、今後河川跡などの出土土器を、そうした視点からも見直すべきかと思う。

- 51) 赤塚は、西上免遺跡の報告書の付論、「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」(赤塚 1997: 79-95 頁)で、さらに廻間Ⅰ・Ⅱ式期の土器による段階区分の内容を整備し、充実させているが、パレス壺に関しては、とくに廻間Ⅱ式 1～3 段階の変遷の細部を解明しきれていないとは思えない。
- 52) 北堀新田前地区 2 号墓からは、第 10 図 7 の壺のほかに、M1 類と思われる壺の口縁部片、胴部片(口縁部片と同一個体の可能性がある)が 1 点ずつ出土している(松本・藤根ほか 2015: 第 59 図 13・15)。